
転換の魔剣

卯ヶ島 名雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転換の魔剣

【Nコード】

N3522BA

【作者名】

卯ヶ島 名雪

【あらすじ】

そこは一つの滅びゆく王国であった。

帝国の策略により、王族は次々に殺され、最早変えようのない現実となっていた。

始まりは師団長の裏切り、国王の殺害、各拠点の制圧など、為すすべもなく帝国に王国は支配されていったのだ。

そんな、既に帝国に塗り替えられてしまった国に一人の青年がいた。

彼の名はジーン。

今でこそ落ちこぼれ酒場に入り浸る人間だが、昔は王国に仕えていた元騎士だった。

この物語は、そんな彼が如何にして帝国に立ちはだかり続けたか綴るものである。

一幕

とある場所に、対立した者達がいた。

謁見の間と言われる場所だ。

そこに、一方には生きている者が一人と既に事切れている者達が二人、玉座と言われる位置に佇み、その周囲にも既に息をしていない者達が数名存在していた。

また、もう一方には数え切れない程の数の者達が扉から溢れかえっていた。

既に場は殺気立った状態で、多人数である者達は各々の武器を構え、今この時にも襲ってきそうな雰囲気であった。

しかし、玉座の方に至っては武器を構えるどころか、既に戦意喪失してしまっていた。

だが、これは仕方ないことだとも言えた。

何故なら残りの二人は国王と王妃。

本来護らなければならない者達が既に息をしていないのだ。

彼はもう戦う理由を失ってしまっていた。

そして唯一生き残ったその人物は、二人の亡骸の前に出て未だ庇い、武器を構えることはしないが、対立した者達を睨みつけるのであつ

た。

「……何で、何でなんですか。どうして、反乱なんてことを、っ！」
不意にその人物が対面しているとある人物に声を荒げる。

「仕方ないこと、と言えば納得するか？」

その人物は大勢の殺気立った者達の一步前に佇み、彼が指揮官であると三人に見せつけていた。

「理由になってません！……師団長！」

庇う彼は尚も訴えかけ、そして悔しさから歯を食いしばる。

「変革を時代が求めているのだよ。そのためには、この国に蔓延る王族を消さなければならぬ。だからそこを退け、ジーン」

師団長と呼ばれた者はさも憂えているとばかりに、ジーンと呼ばれた庇う彼に芝居掛かった言葉を投げかけた。

「変革？ 冗談じゃない！ 何故平和なこの国に変革をもたらす必要がある！？ この国に必要なのはこの平和を維持し続けることであって変革なんてものじゃない！！」

しかし、ジーンはそれを手を振り払う身振りとともに、断固として否定した。

「国が発展するには平穏では駄目なのだ。歴史を紐解けば分かるこ

とだろう？ 発展とは戦や革命によってするものだ」と

だが、師団長は歪んだ笑みを浮かべ、ジーンに諭すように問い掛ける。

「お前もこちらに來い。お前はまだ若い。才能もある。殺すには惜しい人材だ」

更に、まだ齡十八と年若いジーンに形だけなのか本心なのかはわからないが、誘いを掛けた。

「……帝国」

師団長のそれに、しかしジーンは一つの考えが唐突に浮かんたことから違う言葉で答えることにした。

それは思わず師団長が目を見開いてしまうものだった。

「何？」

「帝国が絡んでるんですね？ いや、この国の貴族もか」

ジーンはやはり正解か、と拳を握り締め怒気を更に深めた。

「ほう、その顔からして知っていたのか」

「知っていたと言うよりは、可能性として思いついただけです。…まさか事実だとは思いませんでした。あなたが帝国の人間だということも今の今まで気付けませんでしたよ」

師団長が感心したような口調でこの事を何とも思っていないと分
ると、守る相手も居らず戦意喪失していたジーンも最早我慢の限界
だった。

しかし同時に、だからと言ってこの人数差で下手な真似はするべき
ではないということも理解していた。

切り抜けることは出来る。

逃げることは出来る。

だがそれでもジーンはそうしようとは思わなかった。

いや、心の片隅にある本心は逃げたい死にたくない、等と訴えてい
るのだが、それだけはジーンの矜持が許さなかったのだ。

「ふむ、やはり惜しいな」

師団長は今一度ジーンをじっくりと見据える。

動く邪魔にならないようにした茶色の短髪。

少し視線を下げれば、眼光の鋭き赤茶色に光る瞳と、若さに似合わ
ず精悍な顔付き。

更に身体に関しては無駄なものを削ぎ落としたかのように鍛え抜か
れ、それに加え一片の隙もない動作は流石と言えた。

「だが、それ故に消しておきたい存在でもある、か」

師団長は見据えていた眼をスツと細め、自嘲混じりに呟く。

「……自分は、あなたを許しはしない」

その間に、ジーンも一つの覚悟を決めていた。

「覚悟は出来た。最後の最期まで抗って抗って、抗い続けてやりますよ。そのためなら、自分の下らない矜持は捨てさせて頂きます」

ジーンは師団長に向かって、腰に差していた己が騎士になった時に師団長から貰った剣を勢い良く抜いた。

そして、ジーンはこの時、騎士の道を捨てる覚悟をも決めていた。

「……残念だ。殺せ」

師団長はそんなジーンを憐れんだ表情で見つめ、部下に前を譲った。

師団長は思う。

確かにジーンは国随一の実力者であり、国唯一の魔剣所有者、個としては上位或いは最強の部類に入るかもしれない。

だが、結局はそれだけだ。

個では軍には適わない。

一騎当千だとしてもそれは変わらない、変えられない。

そう確信していた。

事実それは正しかった。

ただ、予想以上の被害を出す羽目になったことと、ジーンが戦う道を選ばず逃げる道を選んだことが、想定外の出来事であったというだけだ。

「ふん、考えたものだ。まさか、一人の死者も出さないとは。……いや、今回はそちらの方が効率が良かったのか」

師団長はジーンと部下の乱戦を傍観しながら、ジーンの闘いに関心を寄せていた。

ジーンは抜いた剣で、関節や利き手、戦闘不能状態に出来るだけの傷を相手に負わせ、身動きを出来なくさせると言う闘いをしていたのだ。

これによって最小限の闘いで扉まで辿り着いていた。

そこでジーンは何を思ってたか謁見の間に振り返ると、師団長を見据える。

「師団長っ、自分は何時か必ずあなたを止めてみせる！ 必ずだ！
！」

そう口にしたジーンは持っていた剣を師団長目掛け投擲すると、今度は振り返らずに逃げていった。

師団長はそれを己の剣で叩き落とし、鼻で笑う。

その後、師団長の部下も追走しようとしたが、師団長はそれを敢えて止めることにした。

「追うな。今は奴一人に人も時間も割くわけにはいかない。放っておけ」

「しかしっ」

「構わんさ、奴は騎士の道を捨てた。腐るのも時間の問題だ。それに、奴一人で何が出来る。気にする必要はないさ」

こうは言ったが、師団長は不意に思ったのだ。

ジーンは生かしておくべき人間だと。

理由はない。

だが、確かにそう思ってしまったのだ。

奴は何か、やるべくして産まれてきた存在なのだと。

それが帝国に仇なす存在としてだとしても。

師団長は思う。

もし、こんな惨劇を起こす前に帝国を裏切って、ジーンとともにこの国を守っていたらどうなっていたのだろうか。

きつと、どんなことよりも誇らしい事だったに違いない。

しかし、それももう過ぎ去ったこと。

そうして、師団長はその下らない考えを振り払い、これからのそれに気持ちを切り換えていった。

過ぎ去った日々は覆らない。

ならば、その時その時を全力で生き抜くべきだ。

そうして、現在^{いま}を、未来^{いま}を築き上げていくことが出来る。

だが間違えるな、過去は後ろではなく、何時も隣にあると言つことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522ba/>

転換の魔剣

2012年1月9日02時49分発行